

プロローグ

僕は、当時まだ生きていた母とこんな話をしたことがある。

中学時代の年末、クリスマスを過ぎたあたりだった。

「ねえ母さん、こういう……人からもらった手紙ってどうやって捨てればいい？」

「え？」

「個人の名前とかIDが入ってるし、シュレッダーかけちゃえばいい？」

それは小学生の頃からなんとなく溜まってきた、女の子からの手紙。

かっこいいとか、好きとか。連絡してとか。

一緒にクラスになりたいとか。付き合ってたとか。

スマホを持つ前に貰ったものがほとんどで、あとは中学に入ってから、駅で知らない制服を着た女の子に渡されたもの。

「トークとかチャットなら気にならなかったら消せばいいけど……、こういうのが地味に、どうしたらいいかわからないんだ」

母は目を細めて嬉しそうに、その手紙を手にとって眺めていた。

「ふふ。いいじゃない。思い出としてとっておけば」

「ええ……。思い出なんかない子ばっかだし……」

「でも一生懸命よ、みんな。かわいい」

「……んー……」

頭を抱える。

ただ伝えたいというものの以外で、恋人になりたいという趣旨のものに關しては、もうきちんとして面と向かって断っている子たちのものだ。

正直、申し訳ないが「処理済み」「対応済み」という印象しがなく、読み返しても顔すら分からない子もいる。

母は仕方なさそうに笑っていた。

「巡世じゆんせいは、好きな子いないの？」

母とそういった話をしたのは、後にも先にもこの一度だけだった。

「……あー……、友達にもたまに聞かれるんだけど、まだそういうの……ないかなあ。てか正直、興味ない」

「あら、そうなの」

きちんと手紙をたたみながら、やっぱり母は微笑んでいる。

その横顔に、つい尋ねたくなった。

「実際……どういう、かんじなの」

母がかぶりをあげる。続きを促すような表情だ。

「どういう……感覚なのかなって。父さんとは、どうだった？ ……

あーでもなんか、想像したら親のそれってあんまり聞きたくないけど」

「なにそれ、ふふ。どっちなの。……んー、そうねえ」

母はそれほど迷わず、こう言った。

「今ここがどこなのかとか、何時なのかだとか、自分が誰だとか……
そういったものが、全部飛んじゃうわ」

「え……？ ダメじゃない？ それ」

意識障害みたいな返事がきて、だいぶ拍子抜けした記憶がある。

「と、思うじゃない？ でもね、それって一瞬なのよ。私には一瞬
だったわ」

「一瞬」

「そ。永遠の一瞬。その一瞬を、ずっと信じていたくて……一緒にい
るのよね、結局は。喧嘩もするけど、母さんはお父さんと一緒になれ
て、本当に良かったって思ってるよ。かわいい子達にも恵まれたし
ね」

臨月の腹を摩る母の声は、どこか遠い。

それはとても果てしないことのように感じた。

なぜかわからないけれど、自分にはそんなこと一生起きない気がする。

どこか同世代の友達と、少しのズレを感じている感覚を思い出した。

通う中学では、まだ入学して数ヶ月なのに誰々がなんとかさんと付き合ったのだの、そうじゃないだの、そんな話が絶えない。

実際そんな軽はずみに決められないし、いまいち決定打に欠ける。

「……うーん。やっぱ経験談を聞いてもわかんないな」

母は軽やかに笑った。

「分かるわけないじゃない、こればっかりは体感よ。泳いだことがない人に、泳ぎ方を教えるなんて無理でしょ？ ふふ、そのうちわかるよ、巡にも。突然前触れもなく来るから。そんな心を揺さぶる人もし現れたら、大切に守ってあげなさいね」

——…：僕は、この昔の母との会話を今になって、噛み締めるように思い出す時があるんです。

まったく予期していなかったその瞬間は、母が言ったとおり、突然でした。

それはロマンチックなものでもなんでもない、僕の日常の中に織り込まれた、永遠の一瞬でした。

僕はこのとき、母のお腹の中から出てきた弟が公園で飲み干した空っぽの水筒を、バラして洗っていました。

——今、どこにいますか。

もどかしいです。

早く、七月になって欲しいです。

——こっちの方が顔色映えるし、印象良くなりそう！ 似合う！

——疲れてる？ たまには手作りを食べよう、作るね！

——試験、二週間前だよ？ これっでもうチェックした？

——え？ 会えない？ あ、だったら……ここ、もう少しこうしたら今週中に上手く組み込めそうだね！

ぜんぶ、よかれと思って何の悪気もなく口にしていたことだ。

無意識にやっていることを明確な嫌悪をもって指摘されたとき、人はノーガードで真横からぶん殴られたような衝撃を受ける。

——おまえ何様なんだよ。たいして何もできねえくせにさ、いちいち人の人生にとやかく首突っ込んでんじゃねーよ。

これは、生まれて初めて付き合って四年間一緒にいた相手から言われた、最後のセリフである。

この言葉を聞く前に一足早く大手企業に就職が決まっていた彼は、ちやっかり私の友達と夏の間にしつぱり出来上がってしまった。

そして友達だと思っていたその子からの、一生忘れられないであろう「別に遊びだったんだけど。なんかごめんね？」を胸に刻むことになる。

ぼこつと、容赦なく抉られた。

けれど意外なことに離れて一年たった頃、彼は「やり直したい」と言ってきた。

許せばいいじゃん。四年も一緒にいて、彼もあんたしかいないんだよ、夫婦になればもっと大変だよ？ 一度の過ちくらいあるよ、もったいない。

周りに散々優良物件と称されて羨ましがられた彼と、何も無い私。意見はさまざまだった。

でも正直色々なものが重なって、とにかくもう無理だった。

一度壊れたものを元通りにするには、何もかもが足りずに。

それで悟ったのだ、私は恋愛そのものが、向いていないと。

誰かを何も考えられないくらいに愛したり、何も手をつけられないくらいに落ち込んだり、そういうのってものすごく疲れる。

そしてそれが、私の恋愛人生終了のホイッスルだった。

学生時代から一緒にいて、ずっと優しかったその人の幻は、ここで跡形もなく霧散した。

——…私、たいして何もできないけど…初対面の受験生に勉強を教えるなんて、本当に大丈夫なんだろうか。

スマホに表示される位置情報が、歩きたびにゆっくりと進む。

ゴールデンウィークの午後は穏やかで、半袖姿の子どもたちの声が住宅街に響き、歩道と車道を隔てる植え込みでは、濃い緑の葉の間からツツジが咲き乱れていた。

鮮やかなピンク色と青空が、梅雨になる前の束の間の爽やかさと夏の予感を運んでくる。

——友人の子の勉強をみてやってほしい、という父の依頼に乗ったのは、一週間前のことだ。

みんなやってるし、この先お金不安だし、そろそろ真剣に副業探そうかなー。

この先結婚の予定もないし。

そう父に話した三日後には、「ちょうどいいのがあるぞ」だなんて、頼んでもいないのにこの話を持ってきた。

少し驚いたのだ。

……たぶん、二年前に元彼と別れてから、私がすっかりインドア娘に成り果てたことも一枚噛んでいると思う。

中学で両親が離婚してから、父と二人三脚で長年やってきた。

一人娘の私をこのところやけに気にかけてくれているのにも、気づいている。

「——あ、ちなみに志岐しぎんとこの長男坊だから。大学受験な」

「——あ、え？ 男の子なの？」

何年か前まで、うちにも何度か来て飲み明かしているのを見ていた、父の会計士仲間であり、大学時代からの親友でもある志岐さん。優しくて穏やかでかつこい志岐さんの奥さんが亡くなってからは忙しくなってしまう、うちに来る機会がなくなった。

「——塾で、と志岐本人は提案したらしい。しかし息子が断ったんだと」

「——え、なんで？ 勉強が嫌いとか？」

「——違う違う」

父の話によるとその息子くんは、志岐さんの奥さんが亡くなられてから働く父の負担を少しでも減らそうと、三人いる歳の離れた弟たちの面倒を常に見ているという、大変な苦勞人らしい。

「——だから、時間に都合のつく家庭教師がいいだろうって。はじめ本人はそれすら遠慮してたらしいが、まあ……志岐としては、父親としてなにかしら、してやりたいんだと」

「——なるほど……」

……いまどき、そんな良い子、いる？

この段階で、その彼に少しだけ興味が湧いた。

……とはいえ。

初対面の受験生に勉強を教えるなんて、緊張しないわけがない。

せつかくの爽やかな陽気だというのに、胸の奥はちつとも落ち着かなかった。

そして、そんな志岐家の前について、深呼吸。

「ふー……………」

手のひらに“人”と三回書いて、ひと飲み。

口角をみいつ、と上げてから、インターホンを押した。

——ピンポ——……………

中から、「ぼくがでるぼくがでるぼくがでる」と小さな男の子の声がする。

思わず、自然と口角が上がった。

可愛い声だったから。

Bannon! と遠慮なく勢いよく玄関が開き、「はあい!」と飛び出してきたのは、五歳くらいの男の子だった。

「なんですかあ？」

きゆるんとした目でこちらを見上げるその顔に、たまらない感じが込み上げる。

なにこの子！ ものすつごくかわいい！

ゆつくりとしゃがみ込み、笑いかけた。

「ふふ、こんにちは。おうちの人、いますか？」

「はい、ぼくはこのおうちのひとです。しき、こうせいといいます」

「わ、お名前言えるの？ すごーい！」

「さつき、じゆんにいと、こうえんいったの」

「えーそうなのー？ お天気いいもんね！ お兄ちゃんと公園いいなあー！ 暑くなかった？」

「——あ、こらちよつ、煌世！」

奥から聞こえたのは、若々しく、甘くて低い声。

——…あ…。

えっへんとドヤった顔をしたこうせいくんを見つめ合っていたけれど、思わず…立ち上がってしまった。

幼児用の水筒をバラしたそれを両手に持ったまま、躍動感のあるポーズで彼はポカンと口を開けている。

それでも、びっくりするほどに整ったその容姿は、目を瞠るものがあった。

色白で、端正な顔立ちはすこし憂いのあるような雰囲気。

口元にほくろがある。

誰も放っておかないであろう美しさと、翳りが噛み合わさっている。

背の高さは百八十七センチを越したくらいだろうか。

あどけないような…大人になりきる途中だけど、その高身長も手伝ってか、すっかりとした男性らしい体つきをしていた。

——……んー……！　こー……れは……、綺麗な子……！

そろそろ……なにか彼に言わないとなんだけど、そのなんとも言えない端麗さに、思わず見とれてしまっている。

ただ、ふと気がついた。

彼もまた、まっすぐに私を見つめていることに。

あれ？　会ったこと……あるっけ。

思い返してみても、それはないといえる。

自然に少し圧を感じるほどに、食い入るように見つめられてしまった。

……な、なんか変だったかな……？

メイクは多分大丈夫だと思っただけ……。

ちよつと……ずつと見られていて穴が開きそうな感じだったので、とりあえず口角を上げて、「こんにちは」と微笑んでみせた。

そうするとやつと、彼がハツとして我に返った。

「あ……つ、あ、もしかして……父の、……ご友人の、あ、ええと……
家庭教師の、方でしょうか」

……おつと。……耳まで赤面している。

……ええ……。か、かわいいな……？

……と、思ったけれど、一切顔に出さない。

こんな多感な世代の子に、キモがられたら一発アウト。

さっぱりとした落ち着いたキャラを、通さなければならぬ。

「はい。二時から、と窺っていたんですが……合ってますか？」

そう伝えると、彼はしばらくぼんやりしていた顔をハッとさせて、
まっすぐに立った。

そして、きつちりと頭を下げた。

「はい。ありがとうございます、志岐巡世しきじゆんせいといいます。よろしくお
願いします」

綺麗なお辞儀の角度が、もう育ちの良さというか、人柄の良さが出ている。

そして顔を上げて、ゆっくりと微笑んだこの少年……もう少年というには大人な、けれど透明感も持ち合わせたこの弩級の美青年に。会った瞬間にはもう、無性に心惹かれていたのだった。



……とは言っても、相手は父の親友の息子。しかも高校生。

目の保養にはなるかもしれないけれど、決してやましい対象にはならない。

それに彼だって、同世代の女の子からすると目劣りする年上の社会人女なんて、興味の対象からは外れるだろう。

私も社会人ン年目、それなりに洗練された美しい男性にも見慣れた年頃ではある。

そこまではわはわして、動揺なんてしない。

動揺、なんて……。

「よし、じゃあ現状を教えてね。今不安なこととか、重点置きたいこととか、ある感じかな」

綺麗に片付けられた彼の部屋にて、今後のスケジュールをすり合わせる。

「あ、はい、ええと……」

パラパラとノートをめくる彼の手は白く、骨ばっていて大きい。

とても好きなタイプの、手だった。

デスクに向かう横顔はきめ細やかな白肌で、まばたきのたびに睫毛が揺れる。

……いやほんと、整ってるなあ……。

けれど、さつき感じた翳りの原因が、今わかった。

瞼が少し落ち窪んで、隈ができています。

……この子……、すっごく疲れてない……？

そして見せてもらったバーチカルの手帳ノートには、びっちり予定が詰め込まれていた。

……え？

「え」

朝から、晩まで。

その内容というのが、受験生の勉強計画だけではない。弟たちの学校の行事、習いごとのお迎え、アルバイト。

末っ子幼稚園児の送り迎え、面談の時間まで。

「すみません、ごちゃごちゃしていい」

「いやいや。すごいねこれは……」

勉強時間は、十分に確保できているスケジュールといえるけれど。

「こうしておかないと、時々……曜日が分からなくなってしまうので、自分のことも、弟のことも。もう全部一元化しているんです」
ノートを指差して「それ、いい？」と尋ねると、彼が「はい」と渡してきた。

パラパラめくりながら、思ったことを述べてみる。

「……ねえ、これさ」

「あ、はい」

「巡世くん、いつ休んでる？」

「……えっ」

「ときどき、勉強してて全然中身入ってこない時、ない？」

「あー……」

目が合うと、少しはにかんで視線を彷徨わせるその仕草に、不思議と風いだ時間を感じる。

「休みは必要だと思うよ。それに、一人の時間も」

「あー……はは、考えたこともありませんでした。それに父と分担しているので、そこまでは……」

「……うーん。じゃあ……そうだな……。あ、ちよつと借りるね」
彼のペンケースから、ひよいとシャープペンを取り出した。

「期末の結果にもよるけど……、できれば週に二、三回、煌世くんの保育を二時間延長。そのうちの一回は自分を休める二時間に充てる。もちろん帰ってきて寝てもいいし、なんか息抜き。一人でリフレッシュするの。で、残りの二回分の延長時間は集中して勉強。もともと塾に行く手筈を、志岐さんがとってくれていたんだよね？」

「あ、けど……こども園はすみやかな迎えを、って……」
「うん。夕方延長に関しては家庭によってさまざまな理由があるとは思うけど。でも、巡世くんが受験生だつてことを園側も把握してくれると思うし、家庭の事情も鑑みて、理解してもらえらると思うよ」

「ん……」

顎に手をやり、逡巡するその姿も文句なしだ。

……これはモテそうだな。

いや……真面目に話さなきゃだけど、あまりの美しさにちよつと脳内イレギュラーが発生している。

……こういう歳の子って、これまでで何人くらいと経験があるんだろうか。

そんな脈略のない下世話なことが浮かんで、自分の中だけで辟易した。

無論、顔には出さない。

「まあ、それはお父さんと相談するといいね。それにこれ以上カテキヨで時間埋めたりしたら、きつとキツくなるよ。だから私はあくまで補助に回ろうかな。どうしても躓くところを事前に連絡してもらえれば、こっちも色々準備して対応できるから。でもね、それだけで思ってるより、巡世くん自身の負担は軽くなると思う」

「負担……ですか」

「うん、休むこともスケジュールのうちだからね。だから週一の私との時間は、分かんないところを聞くゆい回にしよう！ 人がいないとついつい根詰めてやってしまうでしょ。だから私はゆるゆるする時の……相談役！ みたいな感じで。親同士知り合いなんだし、本当に遠慮しないでね。とにかく、まずは自分の体のメンテナンス。受験生はとくに大事だよー」

「休む……ことも、スケジュールのうち……」

「そうそう。よく見て。今の感じだと、ブラック企業と同じじゃない？ 疲れ切った頭に叩き込む一時間より、効果的にやる二十分、二十五分」

「効果的にやる……二十分……」

おうむ返しをしながら、考え込むような彼の横顔を見て、——……ハツとした。

——おまえ何様なんだよ。たいして何もできねえくせにさ、いちいち人の人生にとやかく首突っ込んでんじゃねーよ

元カレの言ってたこと、こういうところなのかもしれない。

今私は、とんでもなく『余計なお世話』をしているのでは……。

「あっ……と、でもごめん、結局は巡世くんが調整することだから色々ペラペラ言っちゃったけど私……」

けれど彼は私の言葉を遮って、手帳を見つめたまま、真剣に頷いた。

「……たしかにその通りですね。効率的かと言われると、そのあたりは僕も自信がありません」

「え……」

——……あれ……？　なんか、……思ってた反応と……、違う。

「なんか……、絶対こうしないと、と思い込んでました。ちよつと……力み過ぎてたかな……」

困ったように笑った彼の姿は少年のあどけなさなのに、表情は完全に大人のそれだった。

……こんな素直な時代が、自分にも……あつたんだろうか。

図らずも、心が洗われるような気持ちになる。

慌てて取り繕おうとした自分の保身に少しだけがっかりしてから、切り替えるべくゆっくり深呼吸をした。

「……うん。毎日頑張るっていうのもすごく大切な心がけだと思っけど、ほんの少しだけ、気持ちを抜く時間というか。ノイローゼ予防にもなるしね」

「……あ、たしかに……。ありがとうございます、なかなか視点が狭まってきました。志望校を変えたので……。ちよつと焦り過ぎてたのかもしれない。保育の件は、父に相談します」

ああ、巡世くん……すごく素直で、本当に……、いい子だな……。
——彼みたいな人は、きつと……、人の心を慮りながら、しなやかに生きていくんだらうな……。

「……あ、あの……？」

困惑した表情で見返してくる端正な顔立ちに、「ん？」と首を傾げた。

彼がシュ——……ツと耳と頬を赤くしている。

……そして、はっ、と我に返る。

……どうやら、ぼうつと見つめてしまっていたらしい。

「……あっ……、ご、ごめん！」

待って待って、そんなつもりで見つめてたんじゃない！

じゃ、じゃあどういいうつもりなんだって言われたら、それもわかんないけど！

わ、どうしよう恥ずかしい！

慌てて、動揺して。

借りていたシャープペンが勢いよく机の対極、彼の体の向こうに吹っ飛んだ。

「あわっ、はややっ!？」

そして変な声を出してしまい、思わず隣の彼の椅子の背を掴んで、ガタツと身を乗り出してシャープペンを取りに立ち上がる。

「……む、っ!？」

——……ん？

胸のあたりに、違和感。

……やらかしてしまった。

今の一連の動きが、図らずも思いっきりおっぱいを……その綺麗な
お顔に、押し付けてしまっている。

……さ、最悪だ！ な、なんちゅー……ことを……！

——……やばい、捕まる！

こんな多感な時期の美男子に、と、とんでもないセクハラを！
光の速さで体をガバツと離す。

「あ、あ！ ごめん！ ごめんね!」

「い、いえ！ こっ……こっ……こっちも、避けるタイミングがなくてっ！
すみません……!」

真っ赤になって両手を顔の前でいえいえしている巡世くんは、申し訳ない思いがどんどん積み重なっていく。

そんな、おっぱいだけでこんな初心な反応をするなんて……。

正直可愛くて、さらに罪悪感が込み上げる。

あああもう、最悪だ。こんなのただの変態だ！

気まずい空気を一掃するべく、パァン！ と柏手を打った。

いや、なんでだよ。って自分でも思ったけど。

いやもう、そうするしかないよ、思ったから。

「……はい！ と、とりあえず！ 勉強！ しよっか！」

「あ……、はっ……、はい！」

——……けれど、勉強を見る傍ら、見てしまったのだ。

彼の座っているジョガーパンツの中心が、しっかりと主張して盛り上がってしまったのを。

……もう、ほんつつつとにごめん！ 巡世くん！



その日の夕食時。

私は父に、「志岐さんに……家庭教師代、半額でいいって伝えても
らえる？ ちょっとプランが変わったから」と告げた。

「……半額？ またどうして」

父が怪訝そうな顔をして、ビールの入ったグラスを呷る手を止めた。

「今日勉強見たんだけど……。正直、ほんとに教えることがない。軽くサポートするだけでいい感じだから。だって息子さん、完璧だよ？ 今どきの子にしてはめずらしいっていうか。スマホに直接スケジュール打ち込むじゃなくて手帳使ってるのも推せる」

「ほー。それは関心だな」
長年五年手帳の愛用者である父が、興味深そうな顔をして枝豆を齧る。

「それより、息抜きさせてあげるほうが……。大事な気がするんだよね。なんかさ、……」

続けようとした言葉に躓き、じっ……と互いに見つめ合った。

「……なんだ」

思わず喉まで出かかった言葉を、飲み下すのに少しだけ時間がかかり、父が首を傾げた。

「……えつと……お母さんが……出てつてすぐの頃の……、自分を思い出した、かも……」

すっかりぬるくなつたアクアパツアは、父の好物。

何十回も作つて、今では目を瞑つてでも作れるようになった。

「……言ってみろ」

食べる動きを止めて、父は抑揚なく続きを促す。

それでこちらも食べる手を止めて、今更あまり誤魔化すことでもないよな、と思ひ直した。

「……なんか……あの時、お父さんの役に立たなきやつて……すごい思つた。ちょうど私も受験だったし、ちゃんといい高校入つて、安心してもらいたかった。今思えば、焦つてたなあ、と」

父はもう一度、長缶からビールをグラスに継ぎ足した。

「……初めて聞いた話だな。そうだったのか」

中学三年の時、母は取引先の大企業社長と不倫して、父と別れた。

「巡世くんの場合、まあ……全然、お母さんとのお別れの仕方は……ウチとは違うけど」

黙ってしまった父に、慌てて姿勢を正した。

「ご、ごめん！　なんていうか」

「別にいい。もう何十年前の話だ」

「いや何十年？　そんな経ってなくない？」

変なところで突っ込んだじゃったけど、彼が怒っているわけではないということ、その表情で分かった。

「たしかに、偶然ではあるが……境遇で、共感してやれることもあるだろうな。できるだけ助けてやるといい。志岐の息子も上がいない分、背負ってるところはあるだろうからな」

「……うん。そう……思った」

よかった。父に分かってもらえると、ほっとする。

「分かった、志岐にはこっちから伝えておく。……まあでも、アレだなあ。これ、志岐んちで作ってやれよ」

「え？」

「アクアパツア」

「ええ……ウチの？ これえ？」

「なんだ、こんな美味いもん、他にないだろ」

何食わぬ顔で言う父は、再婚相手も作らず、恋人をここに連れてくることもなく、男手ひとつでずっと私に向き合ってくれた。

正直そのところはどっちでもよかったのに。父が幸せなら。

けどそれが、何より私が大事だと……背中中、いつも言ってもらえている気がして。

志岐さんに大切に育ててもらえているからこそ、巡世くんもそういう行動になっってしまうんじゃないだろうか。

▼
父との夕食を終え、ゆっくりとお風呂の中で回想する。

——…やー…それにしても。

「…あんなイケメンでいい子、初めて会ったな…」
ぽつんと、ひとりごちて。

アイドルとか、インフルエンサーみたいな見た目だった。

遊びたい…盛りだろうに。

まあ、かっこいいし…いい子だから、友達はたくさんいそう。

でもあのスケジュールだと、とてもそんな暇はなさそうだった
な…。

心を支えてくれる、彼女とか…いたら安心だけど。

ていうか……あんなすぐ赤面して、好きな子の前ではどうしてるんだろ。

ぶくぶく、と口まで湯船に沈めて息を吹いた。

——……こっ……こっちも、避けるタイミングがなくてっ！ すみません……！！

必死で気がつかないふりをしてやり過ぎたけれど、ずっとずっと二時間半アレが勃ちっぱなしだったのには、正直、若さを感じてしまった。

本当に申し訳なかった。

……でも、時々興奮をいなししていた「ふう……」という小さくて甘い吐息は、思い出すと、じんと体の奥が疼いてくる。
なんか……うん、本当にトップシークレットだけど。

……すごく……そそれたんだよなー……。

あの、疲れた翳りと、ピュアなギャップが……。

「……いやー……」

基本的に、年下に興味なんてない。

しかもかなり年の差のあるあんない子にこんなよこしまなこと、
思っちゃダメだ……キモすぎる……。

けれど久しぶりに誰かに、異性として意識された気がして。

……なんだろ、この気持ち……。

きつと乾いた砂地が潤ったんだ。我ながらチョロい。

——……けど、妄想するくらいは、……いつか。

誰にも迷惑、かけてないし。

……あのスケジュール帳を持つ骨ばった大きな手は、どんなふう
触るんだろ……。

私の胸は……全部覆えそうな大きさだった。

ちゃぶ……と水音がなめらかに響く。

……そうだな……、たとえば……。

「……どこが気持ちいいか、教えてください」

背後から長身の上半身に包まれて、柔らかく胸を包み込む白くて大きな手。

爪先も指もひとつもかさついておらず、指の腹はやさしい。

ゆっくり手のひら全部で包み込まれる。

ふに……♡と指が沈み込み、されるがまま形を変える。

——……やばい、やめなきゃ。

思わず上擦った吐息が小さく漏れた。

浴槽のふちに頭を預けて、ゆっくり揉みしだかれる。

「……柔らかいですね……ああ、ここも……」

信じられないくらい硬くしこった頂を摘むと、綺麗な爪先が白く変わる。

「ん、んっ……♡」

くりくり♡ と弄られて、ぴくんっ と体が震える。

「——……痛かったですか？ すみません、じゃあ……もっ と優しくしますね」

今度のもどかしいほどにゆっくりと撫でられた。

「……ちが……、もっ と……」

小さく声を発しても、浴室に少し響く。

「——……でも、もっ としたら……声、抑えられます？」

綺麗な顔が近づいて、赤い舌に乳首を舐め上げられる。

「……ふうっ……、んう」

あたたかくて滑らかな舌の動きと吸い上げで、ますますそこは硬くなり、快感に粟立った。

「……………下も、触りますね。ほら、立って……………」

「……………だめだ、こういうの。本当ごめん、巡世くん……………」

ざぼつと音を立てて、浴槽で膝立ちになる。

彼の長い指先が、ぬるっと割れ目を撫でた。

「ひ、……………あっ……………♡」

「……………あーあ……………、ここ、ぐっちゃぐちゃですね……………」

なでなで♡ される指の腹が蠢いて、なかなか中に入ってこない。

「……………僕の指、入りたい？」

入れてほしい、確かめてみたい。巡世くんの、指……………。

「……………欲しいそうですね」

はあっ……………、はあっ……………とあからさまに興奮を抑えた吐息を感じる。

る。

「……………あげます、はあっ……………、僕ので、よければ。……………いくらで

も。ほら……………」

じゅぷつ、と差し入れられて、体が待ちきれず震えた。

「……あつ、はああつ……♡」

「……あー……吸い付いて、ますね……」

ちやぷ、ちやぷ……と指が動くたびに湯を弾く。

「……気持ちよさそうだ……」

「ん、う……！ はあつ……、はあつ……♡」

泥濘にお湯が混じる。

ああ、嫌だな、中にお湯が入っちゃうの……。

でも……。

「……はあつ、ぬるぬるしてますね、……ここ？……」

「……はあつ、ん、そこ……あう……♡」

ちゅこ♡ ちゅこ♡ ちゅこ♡ 指の動きが激しくなる。

あ、だめだめ……！ あ、こんな、……こんな濡れたの、いつぶり

だろ、んう……♡

「——……イくところ、見せてください……、はあっ……、お願い……」
「あ、い……つく……く……く……ッ……♡」
ぐちゅう♡ と奥まで挿れきった時に、頭の奥が痺れて、息が止まる。

ぶるぶるぶるっ……♡ と体が痙攣し、信じられないくらい早く絶頂まで駆け上がってしまった。

びくんびくんと跳ねるように身体が震えた。

——……あ……、ちよつと待って……。

「……さいあく……」

家庭教師初日にして、まだまだあどけない男の子に発情して、帰ってきてからその子をオカズに自慰に耽るとか……。

「……終わってる……」

分かっていた。

思わずしてしまったけど、絶対これは後から罪悪感が残るやつだつて。

……けど、めっちゃくちや興奮した……。

額に手を当てて頭を抱え充分に反省したあと、盛大なため息をつき風呂の栓を抜いて。

……このことは、墓まで持って行かねばなるまい。

そうかたく誓ったのだった。

『——今日はハンバーガーを食べて、少し時間とりました』

仕事終わりの電車で受信したのは、こんにちは、と添えられた白いふわふわのわんこスタンプ。

……なんだかちよつと巡世くんに似てる。かわいい。

そのあとにこのメッセージとフードコートらしき背景で、手に握ったシェイクと二年前の赤本の写真が追加されている。

まるでSNSの映え写真のように見えるのは、シェイクを持っている手が美しいからだろう。

白くてゴツゴツとした骨ばった親指の、ささくれなんてない若々しい綺麗な桜色の爪が写っていた。

汗をかいたシェイクを持つその指先は、結露をなぞって濡れている。

無意識に保存マークをタップしていた。

『えらい！ 休めててえらい！』

親指をグッ！ と立てた犬のスタンプ。

……あー……これ、絶妙にダサくない？ おばさんっぽくないかな。

一瞬迷ったけど、すぐに考えるのをやめてそのまま送信した。

すると既読は秒でつく。

やったー！ と笑った白いふわふわのわんこスタンプが返ってきてすぐに、『明日、待ってます。お話できるの楽しみです。よろしくお願いします』と添えられていた。

「……ん、ぐうっ！」

思わず胸を押さえる。

……やっぱり、かわいい。

——それはそれは前途多難な予感がした家庭教師の仕事だったのだけど、意外にも順調に日々は進んでいった。

なんとというか、息がびったり合う。不快がない。

巡世くんは受動的なところが多くて、でもそれだけではなく、ほどよくこちらにも歩み寄るタイプの子だった。

その匙加減が、うまく言えないが絶妙にちょうどいい。

アドバイスに倣って週に三回、きっちり延長保育を組み込み、その間図書館や近場のフードコートなんかでしっかりと勉強をしながら息抜きをするようになった、とトークアプリで連絡が来るようになった。

勉強面でも、スケジュールの組み方の面でも、はたまた生き方のよくな少しディープな話題になっても。

わからないことは素直に聞いてくるし、だから私も親身に応じたくなる。

「……あの、提案があるんですが」

巡世くんの部屋の中。

その日のスケジュールが終わったあとのことだった。

椅子から立ちあがろうとしていた体を、再び掛け直す。

「うん、なに？」

彼の喉仏が上下する。

「……その……。図書館とか、……どこでもいいんですが」

「うん？」

「今度……。家じゃないところで、お願いできませんか」

「へ？」

……まるで一世一代の告白みたいな意気込みでそう言われて、拍子

抜けした。

「え……。うん。いいよ、どこにしようか」

「えっ、いいんですか」

「え、いいものにも……、間違ひなく気分転換になるよ」

そして、休みの日たまに行くカフェを思い出した。

うんうん。よし、そこに連れてってやろう。

「やった……。ありがとうございます」

……うっ。な、なんとという破壊力だ！

純度百パーセントの笑顔でお礼なんか言われたら、なんでも叶えてあげたくなる。

「じゃあ、いつがいいかなー」

スマホのカレンダーを確認しながら、巡世くんを探ねた。

「あの……、来月の八日の回とか、どうですか？」

「あー七月の二週目ね。……あ、……週末か」

「あ……なんか、予定が入ってますか？」

スケジュールを確認する視線を彼には向けなかった。

声だけで、ワントーン落ち込んだのがわかったから。

どうやら彼は、どうしてもその回でお出かけがしたいらしい。

「ううん、予定はないんだけど……んー……、今ね、行きたいなど
思いついたカフェが……、予約したほうがいいかな」

「え」

ぽ、と目を合わせた。

それだけで、ぽあつと赤くなるのだからかわいい。

このカフェの週末の混み合いを考えると、もう少し郊外の別の店まで足を伸ばしたほうがいいのかもしれない。

「ねえ巡世くん、この日……勉強教える時間の前後って、バイトとか
予定、入ってる？」

「あ、いえ……、入ってないです」

「じゃあさ、少し遠出しようか」

大きく澄んだ目が、さらに開かれた。

「ま……、マジですか!？」

「あ、遠いのイヤ？」

彼がぶんぶん！ と首を横に振る。

その無邪気な反応に思わず笑った。

「ふふ、じゃあ少し早くから出て、ドライブして。ちよつと郊外のカフェで勉強して、帰ってこようか。帰りに本屋に寄ってもいいし」

「いいんですか！ やっ……た！」

ガッツポーズをした満遍の笑みに、息が止まりそうになった。

……あー……やばい。本当に可愛いな、この子。

そこで気がついた。

誰かと出かけようなんて、そしてそれが楽しみになっている自分があるなんて、ものすごく久しぶりなことだなと。

それからあつというまに時は経ち、七月八日。

夏の準備が整った太陽が、雲の波間から湿気を伴って照っている。

ペントハウスのような空間で、選び抜かれた家具もシンプル。

愛犬と立ち寄れるということもあり、よそ様のワンちゃんではあるけれどそれを眺めるのも癒しになる。

無駄なものはなくさっぱりとしているレストランカフェは、この季節は窓辺から海が見えて、手前の庭園が色とりどりの花を咲かせる中に、力強い初夏の緑が映えるのが良い。

混み合う前から陣取ろうと、朝から待ち合わせをして彼を拾い、道中はどこにも寄らずまっすぐここに来た。

家で会う時はいつも制服か、Tシャツやパーカーとジョガーパンツといった格好が定番の巡世くんは、今日はヘアアレンジをしていて、

ゆったりしたマリンブルーの半袖シャツにインナーは白をレイヤードしていた。

タックインしたパンツは、明るいベージュの柔らかくゆるっとしたもの。

ピアスやネックレスのアクセ類、それからスマートウォッチは黒。きつとなんでも着こなすんだらうけど、センス抜群で若々しく、とてもよく似合っていた。

「巡世くん、おしやれ！」

「え！ やった。ありがとうございます、頑張った甲斐がありました」

「え、頑張ったの？ あはは！」

「普段陰キャなんで」

「うそだあ」

「いや、マジですマジです」

彼がそう言つて笑いながら車内に入つてきた時、いつも志岐家で香る柔軟剤の控えめな匂いに混じつて、少し大人っぽいウツディ系の香りがほんり追いかけてきた。

いつも出かける時につける香水……なのかな。

見慣れない装いも相まつて、ドキツとする。

そして彼が助手席に乗ると、途端に車内が狭くなつてさらに二人で笑つた。

「すみません、無駄にでかい図体で……」

「いやいや、なにより！ 高身長的美男子なんてなんぼいてもいいですからね、って構文もありますし」

「ははっ！ なんですか、それ！」

元彼より背も肩幅も大きいその体軀を無意味に比べてしまつて、密かに心の中で謝つたりもした。

軽く甘いものをつつきながら1セット。

不安だという部分を、集中的に潰す時間に費やした。

ランチをとってからあと少し勉強に励もうか、と話をする。

「ちゃんとうまく、休めるようになってきたみたいだね」

そう話題を振りながら、ローストチキンのプレートをつついた。

彼は、ステーキとサラダのプレートを箸でがつついている。

こんなに綺麗な顔立ちなのに、その気取らなさがなんだか好ましかった。

「はい。アドバイス本当にありがとうございます」

丁寧にもその場で小さくお辞儀した礼儀を欠かない彼に、「今さらだけど、年上っていつても私大した人間じゃないし……あんまり畏まらなくていいよ」と笑う。

「そんなわけにいかないです。尊敬してます、めっちゃくちゃ」

……うん、まっすぐだ。キラキラした視線が爽やかで眩しい。

……あれ、今ほんとに梅雨かな？

「……なんか、僕……これに限ったことだけじゃないんですが……。母を亡くしてからこっち、どっかで“何かしてない”と思つてて」

「あー、うんうん」

そういう話は、家でしたことがなかった。

けれど、長男として気丈に振る舞わねばならなかったこれまでの日々を想像すると、その苦惱は察して余りある。

とても気遣いのできる子なんだと、改めて気付かされた。

「うんと……、初日から、そうなんじゃないかなって……実は、気づいてた」

「え、そう……なんですか？」

彼が食べる手を止めた。

「うん。私にも似たようなこと、感じる時期があつたよ。ぜんぶじゃないけど、わかるところもあるから」

彼は続きを聞いたそうにしていたけど、気を使っているのかそれ以上のことを聞いてこようとはしなかった。

「……まあだから、たまにはこういう機会を作って、ゆっくりしたらいいよね」

はにかんで頷いた彼が、食べることを再開する。

頬張る分量に遠慮がなく、潔い。

その食べっぷりが気持ちよく男性的で、穏やかな大人しい雰囲気を少しだけ変える。

そしておそらく、彼の見た目の最大の魅力は、繊細で整った顔立ちに対して、この長身でしっかりとした体つきのギャップなんじゃないかな、と見慣れてくるとわかってくる。

勉強の進捗は順調で、この感じなら再来週から夏期講習と併せて、充分だろうなと判断した。

店を出ると、夕方になっていた。どんよりと雲が空を覆っているけれど、夏至が過ぎたばかりでまだ十分明るい。

「あー……雨……降りそうですね」

フロントガラス越しに空を仰いだ巡世くんの声は、いつもより柔らかく、けれど抑揚がない。

「ねー。昨日も七夕なのに雨だったし。ていうか七夕って晴れることあるのかな？」

「あー……基本ないですね。僕、七夕が誕生日なんですけど、覚える限りでは雨か曇りか……」

——え!?

「待って。え？ 巡世くん、昨日誕生日だったの？」

信号が赤になり、停止する。

「あ、はい。十八になりました」

これまた抑揚のない声。

「え？　もう過ぎてんじゃない、なんで早く言わないの!？」

「えっ!?　あ……すみません！　聞かれなかったの……」

ぽかんと彼を見つめる。

「いやっ……、言おう？」

真剣な顔でそう言うのと、信号が青になった。

「いや、けど……今日、わがまま聞いてもらって……一緒にご飯食べられて嬉しかったし、なんか、僕的には勝手に……祝ってもらってる
気でいました」

「まってまって、そんな……」

いや、誕生日ってわかってたら……、ケーキとか頼めただろうし、
もっと違うお店とか……。

「あっ……ちが、違くて、……か、勝手に祝ってもらってる気にいる
とか、そういう、キモいですよね！　わ、忘れてもらって……大丈夫
夫……です、すみません……」

だんだん小さくなっていく声に、ぎゅうつと胸を押さえたくなる。耳まで真っ赤にしているその顔を、運転中でじっと見つめることができないのが、もどかしかった。

「……ケーキ」

「え」

「ケーキ、食べよ。あとなんだ、えー、待ってね。あ、ローソクか」

「え!? あ……」

ぐるりと見回し、反対車線にコンビニを見つけたので脇道に反れる。

すぐに寄り、彼を連れて降りた。

スイーツのコーナーを見て、どれでも好きなのをというと、彼はしばらく遠慮していたが、しばらくして嬉しそうにちょうどいいマグカップくらいの大ききのケーキを選んだ。

それから近接の百均に寄って、1と8のキャンドルとライター、ハッピーバースデーと描かれた安っぽい紙の王冠を買い足した。

巡世くんは「あの」「そんな」「大丈夫ですよ」「えっ、その王冠いります？」と最初戸惑っていたものの、最後のほうは私が何を言ってもきかないと思ったんだろう。

そこからは何も言わずに笑って、着いてくるようになった。

「たぶんね、この近くだったと思うんだよね」

記憶が確かなら、海岸沿いの駅の南側に、海に見える公園があったはず……。

「いいな。思いついたら、何でもできますね、車」

咄嗟の思いつきで連れ回したのに、彼は楽しそうだった。

——たどり着いた公園の高台に位置する駐車場。

目の前には雨がしとしと降り出した曇天と、暗がり荒んだ海しか見えず、当然車は他に停まっていなかった。

「……あっちゃー……、晴れてれば夕焼け、絶景だったのになあ」

「ははっ！ いや、いい景色です。梅雨の海！ って感じで」

朗らかにそう笑う美しい横顔は、どんよりした背景をもっともしない煌めきを持っている。

……ああ、優しくてかっこいい。素敵だね。

心の中だけで、言葉をとどめた。

「……よし、じゃあ……ふふ、準備するから、目を瞑って……あ！ 待った！ 後ろで、これ被って待ってて！ それがいいね」

はい、と紙の王冠を手渡す。

「え？ あ、ああ……、ははっ。はい」

雨が降っているから、外には降りずに間をすり抜けたら？ と提案すると彼は頷き、「おわ、キツ！」とか笑いながら、大きな体を縮こませて運転席と助手席の間から、窮屈そうに後部座席へ移る。

「目、瞑ったほうがいいですか？」

「ふふ、うん。よろしく」

「ん、ふふ。わかりました」

彼は運転席の真後ろに移動すると、窓側に頭を預けて目を閉じた。盗み見ていないか確かめると、彼は素直に王冠を被って、しっかりと目を閉じていた。

……なにそれ、超可愛い。

なんだかそれだけで楽しい気持ちになってくる。

ケーキに1と8のキャンドルをさして、ライターで火をつけた。

小さな二つの火が、ふわふわと揺れる。

助手席にそれをいったん置いてから、自分も助手席の真後ろへヒョイっと移った。

彼は従順に目を閉じて、「え、何してるんですか、なんの音？」と口元だけで含み笑いを堪えているようだった。

ケーキを持ち、息を吸い込む。

「えーでは私わたくし、まことに僭越ながら……、歌わせて、いただきます」

「——えっ」

「ハッピーバースデー——……」

思わず大きく目を開けた彼に向かって、ヘラヘラしながら歌った。

そうしたかったから。なぜだか、そうしたかった。

彼はというと歌っている間、今までで一番顔を赤くして、「あははっ！」と声を上げて破顔していた。

こんなイタ恥ずかしいことをするのは、もう今生で最後だ。

「……ハッピーバースデー、トゥーユー……おめでとー……」
「あはは！ ……やっべえ！ めっちゃ嬉しい！ ありがとうござい
ます！」

彼が口角をあげたまま大きく息を吸い込んで、ふうー……つと火を
吹き消す。

気恥ずかしさを打ち消すように拍手をしまくった。

なんだかあまりにも可笑しくて、お腹が痛くなるくらい二人で笑っ
た。

プラスチックのフォークを差し出すと、彼は嬉しそうに「いただき
ます」と言って、大きな口でそれを食べる。

「美味しい！」とにこにこしながら、半分ほどがなくなった。

その可愛い姿を、横でじっくり堪能させてもらう。

あ、苺は最後に食べる派なんだね。

どんどんケーキが彼の口へ吸い込まれるさまは、見ていて潔くて気持ちいい。

残り一口を頬張ってから、彼はフォークで苺を刺した。

思わず、やっぱり苺は最後だったんだと笑いが溢れた時。

彼はおもむろに私と視線を合わせた。

「最後の苺、どうぞ」

「えっ……、それがメインじゃないの？」

「あははっ！ いや、あげます」

「なんで!? 苺嫌い？」

「いえ、好きですよ。けどあげたいんです」

「ええ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：私そんな大人じゃないから普通にもらう

よ？ いいの？」

「あははっ！ もちろん。どうぞ」

慈愛に満ちた顔をして、彼はそれを差し出した。

「じゃあ、……いただきます……」

フォークに引っかけかけた苺を見つめてから、彼の手首をそっと掴んで遠慮なく引き寄せた。

彼の目が大きく開かれる。

髪を耳にかけながら顔を傾けて口に入れて齧った瞬間、甘酸っぱい味がじゅわりと広がり……。

本当にもらってよかったのかな？ と問うように見上げたつもりだった。

——……そう……思ったのに。

ぶつかった視線は、ほんのり熱を帯びていた。

彼の尖った喉仏がごくりと上下したのが視界に入り、思わず動きを止める。

「え、ほ、ほんほはは^とは^食は^べは^たは^かは^たは!? ごめ」 「はい。なので、すみません」

——え？

私の謝罪を遮った彼は、顔を傾けて私に近づいてくる。

その時、ふわっと爽やかな香りに混じった男の人の匂いが鼻先を掠めた。

口の端から溢れそうになっているじゅわつとした苺の果汁ごと、はむっ……、と彼は食む。

——……待って、これは……。

「……ん、んう……っ」

丁寧な、分け合うように。

キスは優しかった。

奪うように蹂躪するわけじゃない。

控えめにちゆく……っ、と果汁を吸い取って、そつと舌で唇をなぞられた後、離れていく。

はっ……、はっ……、と小さくも興奮をいなすような息遣いで、彼は真つ赤になりながら、こくんとそれを飲み込んだ。

「……これで半分こ、ですわね……」

赤面したまま、ふにやっとゆるい笑顔を向けられる。

その顔を見て、どうしようもない劣情が走った。

——……ああ、どう……しよう……。

何も言えずに固まったまま……瞬きをしながら見つめ合って、私も苺を飲み込んだ。

それで……やっと時が動き出したように、彼が我に戻る。

「……あ、え!? つと、あ……僕……すみませ……んっ、う……!」

謝らせるのは罪なことに感じる。そう思っただけで欲しくなかった。

思わず、塗り替えて彼の戸惑いを塞ぐように口づけていた。

始めはその形の良い薄い下唇にちゅっ……、と。

それから角度を変えて視線を合わせて、すべてに。

手に持っていたプラスチックのフォークも、ケーキの入っていたカップも、安っぽい王冠も、全部座席の下へ落ちる。

——…：悪いのは、私だ。私だけでいい。

辺りは薄暗く、雨の音が遠い。

時折大粒の雨がパタパタつとドアバイザーを叩く音がした。

…：なんてこと…：してしまってるんだろ、と頭の隅で冷静な自分が問いかけてくる。

唇を重ねたまま、彼の手首を持っていた左手を頬から差し入れ、後頭部を支えた。

コシがあるのに柔らかな髪の手触りが新鮮で、思わず心地よくて撫でてしまう。

ぞくぞくっ…：、と彼の大きな肩が震えた。

…：ああ。どうして、こんなことに…：。

でも本当は今日誘われた時から、少しだけ感じていた。

もしかしたら私達は、今日を越えてしまつたら……何か関係性が変わるんじゃないかって。

……そんなことあるわけないよなと思いつつも、心のどこかでその隙間を彼の態度からいくつも感じていたということを確認してしまえば、驚くくらい、気持ちが楽になる。

だけど、なにがどうだとしても。

こんな、未来ある歳の離れた男の子に……手を出していいわけがないのに。

「……ごめんね。ぜんぶ、私が悪い……。だから巡世くんはなにもし……ん、んうっ！」

言葉を遮られ後頭部に彼の手が回り、唇を寄せられる。

「……先に触れたのは……僕です」

不慣れな舌は、控えめに私の舌を口腔内で探しあて、とろりとゆつくり絡まってくる。

不器用なそれが彼そのものの優しさとダブリ、蕩けそうになった。

「はあ、……ん、う♡」

「……すみません、僕、キスも……初めてなんで……加減、分からないくて……。けど……」

た、たしかに不慣れだけど……。

は、はじめてで苺の果汁を吸い出せるもの!?

戸惑いつつ、与えられた気持ちよさの余韻をいなしていると、彼が上気した頬をそのままに、薄目を潤ませる。

……はあっ……と甘く息を荒げた巡世くんは、精いっぱいゆっくり、優しく。

締め上げるように「……ああ……!」と声を漏らして、私をぎゅうつと抱き寄せた。

……こんなふうに必死に抱き締められたこと、あったかな。

……こんな……だっけ。

こんなにな……、胸が苦しくなる……ものだっけ。

大きな手のひらが、そっと私の頭を包み込んだ。

やわやわと丁寧に愛撫するように唇を重ねながら、私の髪に指先を滑らせる。

その力加減の不慣れさが、逆にどきどきして堪らない。

髪に通される指の太さが、感触で伝わってくる。

まるで、壊れ物に触れるかのような慎重さで撫でられた。

「……あたま、……撫でて……くれるの、きもちいい……」

「髪、柔らかくて……、僕の手も、気持ちがいいです」

巡世くんは、かなり優秀な学び手だった。

ちゅくっ……、躊躇いながらも抑えられないといわんばかりに口づけられる。

そうしながら段々、鼻から息を抜くのも上手になってきているのが伝わってくる。

すりすり……と指先で耳輪を優しく弄られた。

ぴくっ、と反応してしまい、思わずちゅぱっ……と唇を離した。

彼は食い入るように私を見つめながら、だけどそれを止めようとはしない。

頭の横が痺れて……、じわじわと快感が伝達してくるような感じ。

大きくて骨ばった彼の指先は、熱かった。

「んうっ……ああ、……♡みみ、だめ……！」

ちゅっ、と反対の耳は唇で愛でられる。

なにも言わず、啄むのを止めない彼の吐息は熱くて、肩から力が抜けていく。

「は、あう……ん……っ♡」

唇の動きはそつと優しく、そわそわした。

濡れた息の音を直に拾い、頭がおかしくなりそうだ。

「……あの」

頬に差し込まれた手のあたたかさに肩の力が抜けたとき、そっと小さく耳元で囁かれて、視線をそちらに移す。

「……もう少し、触れてもいいですか？」

……問いかけられたことの意味はわかった。

素直な気持ちで答えるのするならすぐに頷くけれど、逡巡してしま
う。

強い意志で断れば、今後彼は私に触れたりはしないだろう。

……だけどそれじゃ、寂しい。

彼にリードさせるのは気が引けるし、もうここは。

覚悟を決めた。

できるだけ涼やかで自然に、でも心の中では決死の覚悟で、明確な意思をもって彼の手を取り、両手で包み込む。

それがお互いの気持ちを無視せずに済む、たったひとつの着地点
だった。

「……巡世くん、ぜんぶ、はじめて？」

圧がないように穏やかに尋ねると、彼は声なくおずおずと頷く。

「じゃあ、どこ、触りたい？」

「ああ……え、っと」

視線が左右に泳いで、喉仏が上下した。

「いいよ。好きなところに、触って」

澄んだ瞳が大きく見開かれ、顔も、耳まで真っ赤にして彼がまなじりを下げる。

それに私も少しだけほっとした。

「……とか言って……そんな、大層なもんじゃないけど」

言うのと、彼は強く何度も首を横に振る。

それから、重ね合っていた手を掴み直された。

「そんなことはないです。少なくとも、……僕にとっては」

彼が私の手を導いた先は、彼の中心。

……あ……。

「あ、あの伝わりますか……、すみません……どうしようもないんです。もうずっと、一緒にいるだけで、こうなってしまうて……」
すりすりとなぞってみる。

窮屈そうに守られたそこは、岩のように硬かった。

「ん……、大っきくなっちゃったね」

「……う、あ……」

その場所の熱さと硬さに、彼の表情に。

庇護欲も支配欲もないまぜになって、ゾクゾクする。

辺りを見回した。私たちの場所だけ窓がほんのり曇っている。

相変わらず雨音は続いているし、ここにぼつんと、私たちだけが取り残されていた。

「じゃあ、さわりっこする？」

カットソーの中に彼の手を誘い込む。

頷いた彼が自然と抱きつくように手を回し、背中を二、三度摩擦した。

ホックを外そうと奮闘しながら、「あっ……と、これ……」と困っていたので、「ふふ、待って」と声をかける。

彼にしがみついたまま片手でぶつんと外すと、彼は「ええ……、神業……」と驚いていた。

思わず笑いを堪えるように見つめて、結局耐えられず二人で笑う。そういうのがスマートじゃないところも、慣れていなくて微笑ましかった。

だけど、……。

「……ん、あ……♡」

あたたかくて大きな片手は、容赦なく胸の全部を包み込んだ。

私を抱き込んだままそうした彼の、はあっ……、という息が耳と首元を温めた。

「あ、……、っふ、ん♡ おっきい……、手だね、巡世くん」

「はあっ……、声、……やばいです。意識飛びそう……」

私が彼の息を拾うように、彼も直に私の声を拾っているらしい。

ズボンの上からでもわかる怒張は手で摩るとより硬くなっている。

「巡世くんも、少し楽になろっか」

「あ……！」

ベルトを外し前を寛げると、ボクサーは先走りをしっかり受け止めて色が変わっていた。

様子を見ながら、そっと撫でてみる。

「うあ……！ あ、あの、待っ……」

ゆっくり取り出して直に触れると、もうそこはガッチガチになっていた。

「あ、う……」

「うわ……、すごい。硬っ……」

「う、うくっ……!!」

彼の顔を見ると、その視線とかち合う。

顔を真っ赤にして、恥ずかしそうに瞳を潤ませている。

……ああ、かわいい。

吸い寄せられるようにその色気たっぷりの瑞々しい唇にキスをした。

ちゅっ……ぱ、と音を鳴らして、力が入らない彼の中でじゅんわり溶ける唾液をちゅく……と舐めとる。

「待っ……ふ、んう♡ あ、やっぱ……、いです、それ、……」

「ん、……♡」

感じ入る彼の顔を見ながら座席を倒して、ゆっくり扱いていく。

より深く舌を絡ませて、いっぱいっぱいになっていく彼の頭を撫でた。

「はあ、……っ、大丈夫？」

彼はこくこくと頷いて、「……やばいです……」と繰り返した。

そうしながらも、反撃みたいに優しく指先で乳首をくりくりと刺激される。

「は、あつ……んっ♡」

「……さつきから、……だんだん、ここ、硬くなつてて」

カリカリ……と弾かれ、ぴくん！ と肩が跳ねた。

「ひゃ、あ♡」

彼の愛撫にひくひくと体を戦慄かせたとき。

——ピカッと、一瞬車内が照らされた。

二人してヒュッ！ と肝が冷えて見つめあう。

駐車場に、一台車が入ってきたのだ。

「あつ……、ちよつ、と……まっつね」

車がパトカーでないことを祈ってチラッと覗くと、ただの乗用車でホッとする。

そんな自分に心の中だけで落胆した。

……勇氣もないくせに、何やってるんだ私。

スー……ッと血の気が引いて……、冷静になっていく。

そばに置いていたブランケットを、彼にそっとかけた。

「えっ、あ」

「……帰ろっか。車が入ってきたから……ここまで、だね」

よっと、と彼に抱きついているような形になっていたのを起き上がらせて、素早く身なりを整える。

すると、巡世くんが起き上がった。

「あ、待っ……、待ってください、あの」

「ん？」

巡世くんは真っ赤になって、泣き出しそうな顔をしている。

それもそうだ。こんな中途半端で終わるなんて。

可哀想なことをしてしまったと思い、謝ろうと口を開きかけた時。

彼の顔つきが、変わった。

「……あの。朝まで一緒にいたい」と……僕が言ったら、叶えてくれますか」

「——……え!？」

そこからの彼は早かった。

あれよあれよという間にどこかに電話をかけた。

勉強会終わって先生と別れた後友達に遭遇して、誕生日を祝ってくれるというので遅くなる。

今日はその友達の家泊めてもらうかもしれない。

うん、多分泊まると思う。

遅くなっても心配しないで、ということ。

明日の朝約束していた、煌世くんと公園遊びは午後からにするから、ということ。

作り置きはたくさんあるから、夕飯はそれつまんだり適当に済ませ
て。

これらを冷静に伝えていた。

おそらく相手はお父さんの志岐さんなんだろう。

……この子、将来仕事めっちゃできるな。

頭が現実逃避に向かっているのか、そんな場違いなことを思った。

通話を終えた彼がスマホのサイドボタンを押して、浮き上がってい
た画面がフツと消える。

「……朝まで、帰れなくなりました」

彼は落ち着いた声でそう言って、一度私を見つめ、それから頭を下
げた。

「お願いします。一晩だけ、僕に時間をください……！」

……どのくらい精一杯なのか、よく伝わってくる。

握りしめて震える手が、真っ赤になっている頬が、耳が。

……私、こんなにかっこつけずに剥き出しの自分で、人に何かを懇願したこと、あるかな。

彼の優しさに隠れた強かさとは本気度を、私は甘く見ていたことを覚えて……、一つ深呼吸をした。

——手を出してしまったんだ。始めてしまったんだ。

ありありとその事実が頭の中で膨らんで、覚悟が決まった。

「……うん。わかった、今夜……だけね」

きらきらとした瞳が憂いを伴って揺れたのに、見ないふりをした。



言葉少なめに、車を走らせる。

ナビに履歴が残るのは気が引けて、この近くにあるラブホテルをスマホで調べた。

部屋は、ひとつだけ空いていた。

つくりそのものはシンプルだけど、金額が一番値が張るところ。躊躇なくそこを選んだ私を、巡世くんが二度見する。

「大丈夫。部屋、ここしか空いてないし。私が持つから心配しないで」

彼は一度躊躇いながらも、「ありがとうございます」と素直に受け止めていた。

勢いあまってこんなところまで来てしまったはいいものの。

大丈夫かな、これでいいのかな……。

彼の初めてを……こんな形で私が貰い受けて、いいんだろうか。

そんな迷いが、頭の中でぐるぐるしていた。

狭いエレベーターの中で、彼は私の手を労るようにゆっくりと力を込めて握ってくる。

その手のひらの温かさ……それから対照的な指先の冷たさに、胸が奥がきゅっと押しあがって、息を呑んだ。

……こんなピュアな子をここに連れ込む罪悪感と、これからどうなってしまうのかを、知りたい好奇心。

なにより、一緒にいたいと思う抗えなくて目に見えない力に、有無を言わず押し流される感覚だ。

おそらく初めてだと思ふのに、彼は場所に戸惑ったり慌てたり、なんてことはなかった。

部屋に着いて、扉を閉めた瞬間。

何ひとつ言葉を交わさないまま、ぎゅう……つと後ろから抱き締められる。

「……ずっと、こうしたかったです」
耳元で、堪えるような声で囁かれた。

「……ずっと……誰にも見られる心配のない場所で、思いつきり、あなたを抱き締めてみたかった」

きゅ……と胸が締め付けられる。

なんだか、涙が出そうで不思議だ。

——……生まれてこのかた、そんなこと、言われたことない。

そうだよ、こういふところからだよね。初めてだと。

長年どこかに置きっぱなしだった、ときめくスイッチ。

それを不意打ちでこじ開けられて、優しく愛でられている。

まるで小さな子供に戻ったみたいなきもちになって、恥ずかしい。

それを誤魔化すように、振り向き彼の首に手を回して、背伸びをして唇を重ねた。

まだ靴すら脱いでいない。

彼の耳を塞いで、舌を絡ませてくちゅっ……とわざと音を立てた。

「ん、……」

身じろぎした初心な彼の唇は、とても甘い。
れろっ……♡ 舌で柔らかく撫で上げると、彼が興奮したように息
を詰まらせた。

「っ、ふ……、巡世くん……、もう少し、舌……、ちようだい」
「……あ……ッ、は……い……、んう」

食んで吸い付いて、緩急をつけてゆっくりと絡める。
繰り返し、繰り返し。飴を舐め溶かしてあそぶみたいに。
彼の舌を可愛がる。

「は……っ、う……」
はふはふと息をする彼を見たくて、唇を離す。

背の高い彼を見上げた。
……もっとお腹すいてくる感じ、これ、なんだろ……。

思いのままに頬を撫でた。
蕩けた顔の巡世くんの唇は濡れていて、頬は上気している。

瑞々しい色気が半端ない。

「……ね、さっきの車の中の続き、……してもいい？」

私のこの言葉に、彼が瞬きを忘れたように大きく目を開いた。

「……え……？」

キスをしながら、そっと彼のベルトを外していった。

逞しい体をするするとなぞって、しゃがみ込む。

さっさとフロントを開け、ボクサーをめくった。

「あ！ ……う、は、あっ」

ぶるんつと既に大きく反り返った、太く長い熱芯は熱を持ってむわりと湿っていた。

ゆっくりと取り出して、その先端にちゅっ♡ とキスをする。

とろつと粘り気のある透明な先走りか、唇に絡みついた。

明るいところで見ると、熱くて脈打っているのがよく分かる。

……うわあ……、入るかな、これ……。

ツツ——……と下から上へ、確かめるように舌でなぞる。

「あ、待っ……、うっ……あ……！」

丁寧な手で包み込んで、唾液と先走り塗りを塗り込んだ。

「ああっ、う……、待って、あ、は、あう……！」

言葉とは裏腹に、彼は私の髪を撫でて、気持ちよさそうに震える。

「あ、……んっ……♡」

はむっ、と先端を唇でやさしく挟み込んだ。

「ん、うあ……！」

舌先でチロチロと鈴口を刺激して、ゆっくりと全体を啜え込み、舌で熱くて硬い芯を舐る。

「あっ……く……ん……、やば、いです……、それッ……、あ」

じゅぷっ♡ れろっ……♡ じゅぷ……じゅぷっ♡

窄めるたびに、だんだん抗えなくなっている声を感じ取りながら、彼を見上げる。

バチつと目があった。

「あ……！」

真っ赤になって、背を丸めて私の頭を両手でかき混ぜながら、彼は首を横に振った。

「む、むり……！ あ……、かわいい、だめです、で、出ちやいます、やばい、待ってほんとにッ！ あ、くッ、んっ、くく……ッッ！」
ぶるっ……ぶるっ、と彼の全身が戦慄した。

びゅっ♡ びゆるるっ♡ びゆるるる——……♡ と熱く迸るしぶきが喉を打つ。

その勢いが良すぎて、抗えずに何度も嚙下した。

あ、すごい、こんな……出るの!? 巡世くんの、熱すぎ……。
こくん、こくんと何度も飲み込んで、鼻から抜ける青臭さに少しだけ顔を顰めた。

「あ……つく……、へ？ あ、え……飲ん……飲んじやったんですか、うわ、すみません……！」

はあつ、はあつ、と息を逃しながら、彼がこちらを覗き込む。

ゆっくり先のほうを綺麗に舐め上げているうちに、彼自身が柔らかく戻っていく。

「……へへ……、いっぱい出たね……」

彼が泣き出しそうな顔をして、しゃがみ込む。

そして私の額にキスを落としてゆっくり、ぎゅうつと抱き締めた。